

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No.95



2022年9月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

神田バスケットボール資料室

明治大学アメリカ遠征（1932年12月～1933年4月）



1.ネイ・スミス博士と選手たち
カンザス大学にて(1933.2.2)



2.往路「増田貞造」
(1932.12)



3.往路「選手達と船員」プレジデントタフト号にて
(1932.12)



4.モンタナで初めてのスキーを体験
(1933.1.16～17)



5.ウイスコンシン大学ミンウェルコーチと会う
(1933.1.25) ※ 写真中央に剥がれた部分が有ります。



6.ウイスコンシン大学新体育館



7.ネバダ大学と有料試合(1933.2.7)

目 次

- 令和4年度通常総会事務局 2
報告と新役員の紹介
- FIBA ワールドカップ 2023 アジア地区 1 次予選 4
Window 3 ・グループ B の結果 ・男子日本代表の戦績
- FIBA アジアカップ 2022 7
男子日本代表はオーストラリアに準々決勝で敗退
- FIBA ワールドカップ 2023 アジア地区 2 次予選 1 0
「AKATUKI JAPAN」男子日本代表 Window 4 の結果
- 第 24 回 Wリーグ情報 1 3
- 先人の軌跡歴史部 1 4
京都のバスケットボール活動にみる「先進性と先見性」
- シニアチーム紹介 J. J 和歌山普及部 1 9
- 神田バスケットボール資料室事務局 2 0
明治大学バスケットボール部アメリカ横断の遠征
- 高校籠球ふるさと記（石川県編）.事務局 2 2
- 高校籠球ふるさと記（三重県編）.事務局 2 7
- 事務局だより事務局 3 2
- プラザ こぼればなし 3 3

令和4年度通常総会

報告と新役員の紹介

[事務局]

【通常総会の報告】

令和4年度通常総会について、定款27条第1項に基づき書面による開催・審議とし、「令和4年度通常総会資料」をバスケットボールプラザ94号に掲載し、下記議案についてハガキによる賛否回答を会員へ依頼しました。

- (1) 第1号議案 令和3年度事業活動報告
- (2) 第2号議案 令和3年度事業会計収支決算書報告
- (3) 第3号議案 令和3年度監査報告
- (4) 第4号議案 令和4年度事業活動計画（案）
- (5) 第5号議案 令和4年度事業会計収支予算（案）
- (6) 第6号議案 令和4・5年度役員（案）

上記議案をご審議いただき、すべての項目について、会員数136に対して賛成86件を頂きました。そのご承認に基づき、令和4年度の計画、予算などを実行いたします。

また、「事業報告書等提出書」を東京都管理法人課に提出し、すでに収受されたことを報告いたします。

【振興会の活動】

次に、令和4年度に進める振興会の活動について説明します。

・バスケットボール関係者の交流に努力

機関誌「バスケットボールプラザ」の発行を通じて会員・都道府県協会・関係諸団体の情報の交換と講演会、シニア交歓大会など開催による会員相互の交流に努めます。

・バスケットボールの出来事（歴史）を継承

現在・過去の「出来事」「大会情報」「高校籠球ふるさと記」「先人の軌跡」「人物抄」などを企画記事にまとめ機関誌「バスケットボールプラザ」に掲載します。

・バスケットボール関連の資料を収集・整理・保管し公開

戦前・戦後にわたる日本協会関連資料、発行物・新聞・各種大会プログラム・ルールブック・人名録（2000名）、各種記録・映像などを「神田バスケットボール資料室」に保管・整理してあります。

「神田バスケットボール資料室」に保管してある資料を「プラザ」誌上で徐々に公開しています。

・バスケットボール関連の過去の記録・資料の提供に協力

NHK・新聞社・各メディア・情報誌などの取材協力、都道府県協会・会社・国内外大学・チーム・個人などに情報・資料の提供を行っています。

上記活動はすべて会員の皆さんの協力で成り立っています。さらに活動を充実させるために皆さんからどのような情報でも事務局へご連絡ください。

【新役員紹介】

新たに役員に就任していただいた方から、ご自身の紹介文を投稿していただきました。

理事 高橋 旭 (タカハシ アキラ)



私は民間で社会人向けバスケットボール大会の運営、バスケットボール教室を行っております。私は皆さんのようなバスケットボールでの輝かしい経歴・実績はありませんが、日本のバスケットボールが生涯スポーツとして普及させる熱意は負けていないと自負しています。今後、振興会では皆様よりほんの少し若い分積極的にインターネットや SNS など民間で培った色々な企画を通じてバスケットの普及に努めて参ります。

監事 吉田 頼且 (ヨシダ ヨリカツ)



バスケットの関りは、銀行員業務の傍ら 4 年間務めた女子バスケット部監督と 2005 年以降 2014 年定年退職まで大学教育業務の傍ら務めた男子バスケット部部長職です。今般、大野会長からのお誘いで再びバスケットと関りを持つことになりました。

微力ながら精一杯務める所存ですので、よろしく願いいたします。

監事 西川 和人 (ニシカワ カズト)



都立立川高校 東京大学 卒業後 30 年間大蔵省に勤務。

バスケットボールは、高校・大学を通じ 8 年間の部活動、20 数年を経て 45 歳～70 歳の約 25 年間関東実業団リーグでプレイ、2 年前完全にリタイアしました。

監事の業務に関し特段のスキルはありませんので、一般人の社会一般常識をもって本会の業務監視に当たりたいと存じます。

以上

FIBA ワールドカップ 2023 アジア地区 1 次予選

Window 3 ・ グループ B の結果 ・ 男子日本代表の戦績

[編集部]

FIBA バスケットボールワールドカップ 2023 アジア地区 1 次予選 (1st Round) は Window 3 で全日程を 7 月 5 日に終了し、日本代表はグループ B で 3 位に入り、8 月 25 日から開始される 2 次予選 (2nd Round) に出場する。

以下に、1 次予選各グループの結果を記載したのち、男子日本代表チームのオーストラリアで開催された Window 3 ・ 2 試合の戦況を報告する。

1 次予選グループ A ・ C ・ D の結果

グループ A

グループ C

グループ D

順位	チーム	勝	負	順位	チーム	勝	負	順位	チーム	勝	負
1	ニュージーランド	4	0	1	レバノン	5	1	1	カザフスタン	5	1
2	フィリピン	2	2	2	ヨルダン	4	2	2	イラン	4	2
3	インド	0	4	3	サウジアラビア	3	3	3	バーレーン	2	4
4	韓国 (失格)			4	インドネシア	0	0	4	シリア	1	5

1 次予選グループ B の結果

グループ B

順位	チーム	勝	負	オーストラリア	中国	日本	*タイペイ
1	オーストラリア	6	0		○ 76-69 ○ 71-48	○ 80-64 ○ 98-52	○ 98-61 ○ 90-71
2	中国	4	2	● 69-76 ● 48-71		○ 79-63 ○ 106-73	○ 94-58 ○ 97-56
3	日本	2	4	● 64-80 ● 52-98	● 63-79 ● 73-106		○ 76-71 ○ 89-49
4	*タイペイ	0	6	● 61-98 ● 71-90	● 58-94 ● 56-97	● 71-76 ● 49-89	

* : チャイニーズ・タイペイ

2 次予選の対戦相手

1 次予選の各グループ上位 3 チームが、グループ A ・ C でグループ E を、グループ B ・ D でグループ F を形成して未対戦チーム同士が Window 4 ~ 6 にわたり対戦する。

日本はグループ F で、グループ D の上位 3 チーム、カザフスタン、イラン、バーレーンと対戦する。

Window 3 での日本男子代表チームとその戦績

日本男子代表チームの主なスタッフ及び選手は下記の通り。

<主なスタッフ>

役 職	氏 名	所 属
ヘッドコーチ	ホーバス トム	公益財団法人日本バスケットボール協会
アソシエイトヘッドコーチ	ゲインズ コーリー	公益財団法人日本バスケットボール協会
アシスタントコーチ	勝久 ジェフリー	川崎ブレイブサンダース

<「AKATSUKI FIVE」男子日本代表選手>

年齢・所属は2022年7月2日現在

No.	選手名	P	身長 c m	体重 kg	年齢 歳	所 属
※ 1	齋藤 拓実	P G	172	69	26	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
3	エヴァンス ルーク	C	203	100	31	ファイティングイーグルス名古屋
16	佐藤 卓磨	S F	197	93	27	千葉ジェッツ
* 17	須田 侑太郎	S G	190	87	30	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
19	西田 優大	S G	190	90	23	シーホース三河
21	藤井 祐真	P G	178	75	30	川崎ブレイブサンダース
* 33	河村 勇輝	P G	172	68	21	横浜ビー・コルセアーズ
39	富永 啓生	S G	188	80	21	ネブラスカ大学
43	永吉 佑也	P F	198	115	30	ライジングゼファー福岡
45	テーブス 海	P G	188	85	23	滋賀レイクスターズ
※ 55	谷口 大智	P F	201	105	32	茨城ロボッツ
71	井上 宗一郎	P F	201	105	23	サンロッカーズ渋谷
88	張本 天傑	P F	198	100	30	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
91	吉井 裕鷹	S F	196	94	24	アルバルク東京
	平均		190.9	90.4	26.5	

PG ポイントガード、SG シューティングガード、SF スモールフォワード、PF パワーフォワード、C センター

※：オーストラリア戦のみ、*：チャイニーズ・タイペイ戦のみ

7月1日(金) vs. オーストラリア

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	13	4	10	25	52
オーストラリア	22	25	21	30	98

オーストラリアはNBA経験のある実力者選手2名を擁し、Window 2よりも強力なチームになったと感じた。

日本は、代表初選出の#45 テーブス海、#91 吉井裕鷹が先発で起用されたが、オーストラリアに立ち上がり2本のショットから連続得点され、第1クォーターで9点差をつけられる。第2クォーターに入ると日本のオフenseは単発な3点シュートが増え、更にミスも重なり、4得点のみであり、17-47と30点のビハインドを負う。

第3クォーターも日本がなかなかフィールドスローを決めかね、フリースローももらえず、10点しか上乗せできない間、オーストラリアは着々と得点を重ね、27-68と更にリー

ドを広げる。第4クォーター、日本は10分間だけで25点を挙げているが、ホーバスヘッドコーチの発破があった故と聞く。日本はこのゴールへのアタックが得点を伸ばしたが、相手オーストラリアも底力を発揮して同じ10分間で30得点をあげている。この試合、日本はほぼダブルスコアで完敗した。

ちなみに、オーストラリアの3点シュートチーム確率は17/39の43.6%であり、日本は#39 富永が成功率45.5%（5/11本）と頑張ったが、チームは成功率27%（10/37本）と残念な数値で終わった。

7月3日(日) vs. チャイニーズ・タイペイ

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	25	17	18	29	89
*タイペイ	14	13	9	13	49

*:チャイニーズ・タイペイ

Window 2で対戦した時とは大きくメンバーが相違するチャイニーズ・タイペイに対し、日本も若き新戦力が初選出され、平均年齢が26.7歳から26.1歳に若返った。

第1クォーター、途中出場の#39 富永啓生が6分間で12得点。#45 テーブス海からパスを受けた#71 井上 宗一郎が3点シュートを決めるという素晴らしいコンビネーションがみられた。#17 須田侑太郎も交代してすぐに3点シュートを決めるなど、3点シュートがチーム全体で12/43本（成功率28%）の36得点であった。

日本は、ホーバスヘッドコーチが目指すバスケットを実行し、89-49と40点差をつけてチャイニーズ・タイペイに快勝した。

しかし、3点シュート成功率の28%はチーム目標40%に程遠い。オーストラリアに届かなくても、30%台には載せられるのではないか。第2、第3クォーターで、相手チームの得点が少ないにもかかわらず、日本チームの得点が伸びていない。チームモットーの一つにスピードが挙げられているので、このような相手の場合、フィールドゴール成功率43.3%（29/67本）を50%まで上げ、得点も伸ばすことを期待する。

あとがき

今回、Window 3は、完敗と大勝との2ゲームであった。しかし、ホーバスヘッドコーチが多く選手を代表候補に選び、目標のチームに近づけるべくトライしていることがわかる。7月には、このゲームに続き、アジア大会があり、その後、8月下旬から来年2月末まで、ワールドカップアジア地区2次予選がある。この間で選手と共にチームが育つことを期待したい。

ここ1次予選でのチームは、NBAで活躍の八巻、渡辺、更に、外国で活躍の馬場、Bリーグトップチームの選手など、有力選手が不在の若手によるチームである。今回の若手が伸びて不参加の強力選手とチームが組めた男子日本代表チームの、ワールドカップ本戦での活躍が楽しみである。

以上

FIBA アジアカップ 2022

男子日本代表はオーストラリアに準々決勝で敗退

[編集部]

FIBA バスケットボールアジアカップ 2022 は、2022 年 7 月 12 日(火)～7 月 24 日(日) (当初、2021 年 8 月に行われる予定であったが、コロナ禍の影響で延期されたもの)、インドネシア (ジャカルタ) で開催され、優勝はオーストラリア、2 位はレバノンで、日本代表は準々決勝で優勝チームのオーストラリアに敗れた。

男子日本代表チーム

本大会へ臨む「AKATSUKI FIVE」バスケットボール男子日本代表チームの選手 12 名が 7 月 5 日に日本協会から発表された。今回は B リーグでファイナルを争った宇都宮と琉球の選手が外れ、渡辺雄太と今後の日本を背負うことが期待される若手を中心とするメンバーが選ばれた。ホーバスヘッドコーチが、来年 9 月のワールドカップ本戦へ向けて、初めての男子チーム強化に、B リーグで広い範囲から代表選手を選んでいる。

<主なスタッフ>

役 職	氏 名	所 属
ヘッドコーチ	ホーバス トム	公益財団法人日本バスケットボール協会
アソシエイトヘッドコーチ	ゲインズ コーリー	公益財団法人日本バスケットボール協会
アシスタントコーチ	勝久 ジェフリー	川崎ブレイブサンダース

<「AKATSUKI FIVE」男子日本代表選手>

* 年齢・所属は2022年7月5日現在

NO	選手名	P	身長 c m	体重 kg	年齢 歳	所 属
2	富樫 勇樹	P G	167	65	28	千葉ジェッツ
3	エヴァンス ルーク	C	203	100	31	ファイティングイーグルス名古屋
12	渡邊 雄太	S F	206	97	27	—
16	佐藤 卓磨	S F	197	93	27	千葉ジェッツ
17	須田 侑太郎	S G	190	87	30	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
19	西田 優大	S G	190	90	23	シーホース三河
33	河村 勇輝	P G	172	68	21	横浜ビー・コルセアーズ
39	富永 啓生	S G	188	80	21	ネブラスカ大学
45	テーブス 海	P G	188	85	23	滋賀レイクス
71	井上 宗一郎	P F	201	105	23	サンロッカーズ渋谷
88	張本 天傑	P F	198	100	30	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
91	吉井 裕鷹	S F	196	94	24	アルバルク東京
	平均		191.3	88.7	25.7	

PG ポイントガード、SG シューティングガード、SF スモールフォワード、PF パワーフォワード、C センター

予選リーグ・日本の含まれるグループCの成績と日本の戦績

グループ C

順位	チーム	勝	負	イラン	日本	シリア	カザフスタン
1	イラン	3	0		○ 88-76	○ 80-67	○ 96-60
2	日本	2	1	● 76-88		○ 117-56	○ 100-68
3	シリア	1	2	● 67-80	● 56-117		○ 77-67
4	カザフスタン	0	3	● 60-96	● 68-100	● 67-77	

7月13日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	23	22	29	26	100
カザフスタン	22	26	11	9	68

ホーバスヘッドコーチは、前からプレッシャーをかけた #33 河村、身体を張ってディフェンスをした #91 吉井、そして 13 点をあげた #39 富永啓生の若手選手たちを評価した。

スタッツをみると、#33 河村が 13 分間出場でシュート成功率 100% の 8 得点であるのに対し、#17 須田侑太郎（名古屋ダイヤモンドドルフィンズ）が、10 分間の出場だが、3 点シュート 1/6、2 点シュート 3/3 の 9 得点と活躍しているのが目立った。

7月15日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
シリア	9	18	15	14	56
日本	29	39	28	21	117

この試合、#17 須田が 3 点シュート 9/12、フリースロー 6/6 で 33 得点を稼いでいる。日本のチームアシスト 34 本は、よりよい体勢にある味方へのパスであり、3 点シュートの成功率 54% に寄与している。

7月17日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
イラン	27	21	20	20	88
日本	24	10	12	30	76

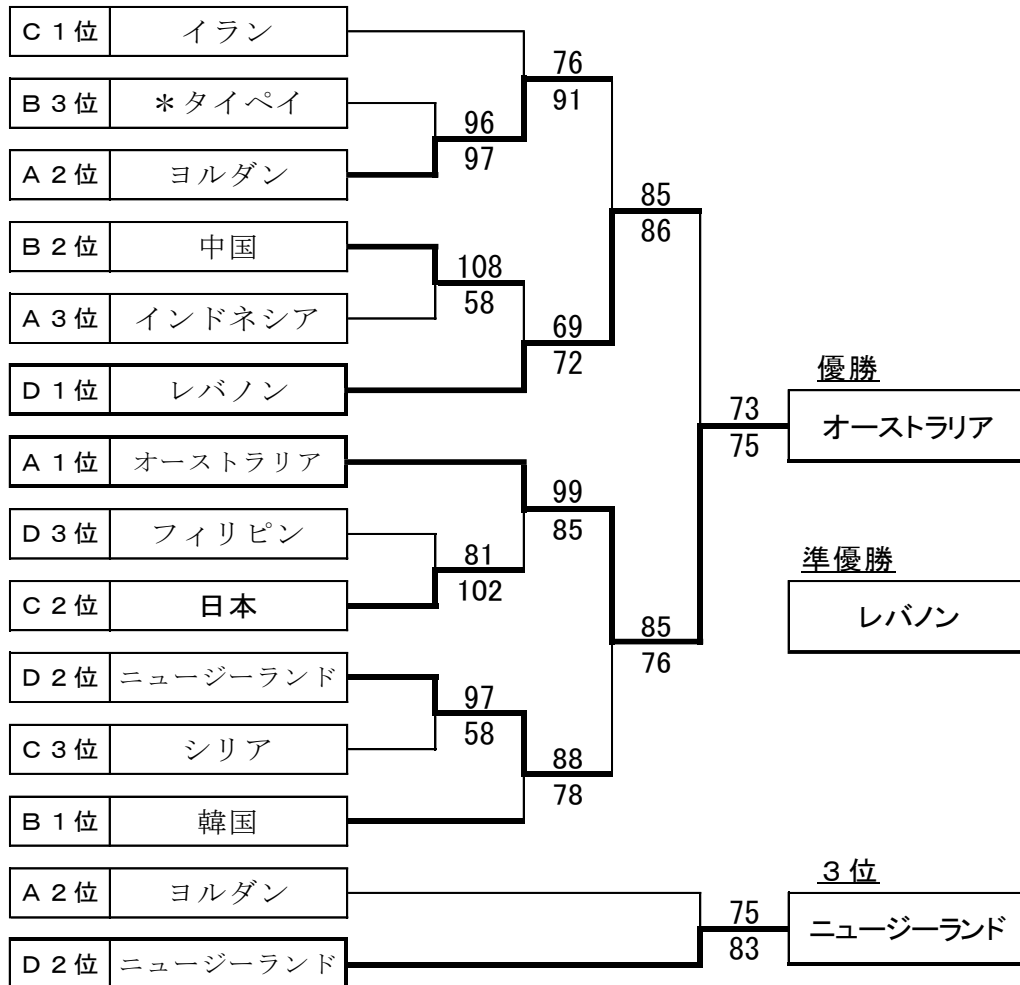
日本は、良い状態でスタートしたが、第 2、第 3 クォーターで失速している。

オフェンスリバウンドが長身チームイランの 15 本に対して日本は 5 本しか得られず、2 点シュートはイランの 30/57 本に対し日本が 14/26 本と半数である。ディフェンスリバウンドはほぼ互角なので、ディフェンスからの素早くスピードあるオフェンスで確実に 3 点シュートに持ち込む日本が目指すプレイが欲しい。

結局、イラン戦では、日本の二桁得点者は長身の #12 渡邊雄太の 17 得点、#71 井上宗一郎の 12 得点であり、相手長身者による厳しいディフェンスに打ち勝つ短身長者の長距離砲が必須である。ホーバスヘッドコーチが日本チームに課す三点のうちの一つ、3 点シュートでの得点が本対戦でチームの問題点として浮き彫りにされた。

今後の試合での向上を期待したい。

決勝トーナメント・結果と日本の戦績



* : チャイニーズ・タイペイ

8位決定戦 7月19日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	32	18	27	25	102
フィリピン	16	18	29	18	81

この試合、日本本来の試合運びで、スタメン主力選手5名が2桁得点したのが喜ばしい。しかし、#12 渡邊が途中負傷したのは痛く、今後の試合に影響しないことを祈る。

準々決勝 7月21日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
オーストラリア	33	16	26	24	99
日本	22	12	20	31	85

この試合、#12 渡邊が負傷欠場したためか出足が悪く一気に離され、ペイントエリアを抑えられてリバウンドが得られなかったが、第2クォーター以降は3点シュートを決めて互角に得点し、63 - 66で3点のみのビハインドであった。今後の楽しみである。

以上

FIBA ワールドカップ 2023 アジア地区 2 次予選

「AKATUKI JAPAN」男子日本代表 Window 4 の結果

[編集部]

FIBA ワールドカップ 2023 アジア／オセアニア地区 2 次予選（2nd Round）が Window 4 から始まった。2 次予選のグループ構成と試合日程とは下記のとおりである。

2 次予選の組み合わせと開催期日

グループ E：1 次予選のグループ A とグループ C からの 6 チーム

グループ F：1 次予選のグループ B とグループ D からの 6 チーム

Window 4 2022 年 8 月 25 日 ～ 8 月 30 日

Window 5 2022 年 11 月 10 日 ～ 11 月 14 日

Window 6 2023 年 2 月 23 日 ～ 2 月 27 日

WC 本戦には、アジア・オセアニア地区から開催国推薦のフィリピンと日本とこの 2 チームを除く各グループ上位 2 チーム、計 6 チームが出場する。（当初、開催地のインドネシアを含む 7 チームであったが、インドネシアがアジアカップ 2022 で所定の上位 8 位以内に入らなかったため開催国枠での出場が得られなかった。）

また、グループ F では、Window 4 の終了時点で対戦がまだ残されているが、1 位ニュージーランド、2 位レバノンが確定したので、開催国枠フィリピンとの 3 チームが本戦に出場することとなった。

2 次予選 Window 4 までのグループ F の成績

グループ F

順位	チーム	勝	負	オーストラリア	中国	カザフスタン	イラン	日本	バーレーン	タイペイ / シリア
1	オーストラリア	8	0		○ 76-69 ○ 71-48		○ 98-68	○ 80-64 ○ 98-52	○ 104-50	○ 98-61 ○ 90-71
2	中国	6	2	● 69-76 ● 48-71		○ 68-56		○ 79-63 ○ 106-73	○ 80-67	○ 94-58 ○ 97-56
3	カザフスタン	5	3		● 56-68		○ 73-69 ○ 68-60	● 48-73	○ 95-48 ● 51-62	○ 84-74 ○ 81-71
4	イラン	5	3	● 68-98		● 69-73 ● 60-68		○ 79-68	○ 82-66 ○ 100-64	○ 80-68 ○ 91-56
5	日本	3	5	● 64-80 ● 52-98	● 63-79 ● 73-106	○ 73-48	● 68-79			○ 76-71 ○ 89-49
6	バーレーン	2	6	● 50-104	● 67-80	● 48-95 ○ 62-51	● 66-82 ● 64-100			● 64-80 ○ 76-67

Window 4 での日本代表チーム戦績

日本代表チームは、FIBA バスケットボールアジアカップ 2022 を終えた 7 月 28 日に「AKATSUKI JAPAN」として再スタートし、8 月 13 日、14 日の Softbank カップ 2022 でイランに 2 戦 2 勝を果たした。ホーバストム ヘッドコーチは Window 4 の代表選手 19 名を選出し、出場選手はその中から各試合で下記の通り登録された。

＜主なスタッフ＞

	役 職	氏 名	所 属
※	ヘッドコーチ	ホーバス トム	公益財団法人日本バスケットボール協会
※	アソシエイトヘッドコーチ	ゲインズ コーリー	公益財団法人日本バスケットボール協会
※	アシスタントコーチ	勝久 ジェフリー	川崎ブレイブサンダース
§	ヘッドコーチ代行	佐々 宜央	宇都宮ブレックス
§	アシスタントコーチ	富山 晋司	公益財団法人日本バスケットボール協会

§ : イラン戦のみ ※ : カザフスタン戦のみ

＜「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表選手＞

年齢・所属は2022年8月29日現在

	NO	選手名	P	身長 c m	体重 kg	年齢 歳	所 属
	2	富樫 勇樹	P G	167	65	29	千葉ジェッツ
	6	比江島 慎	S G	191	88	32	宇都宮ブレックス
※	11	チェンバース アキ	S F	191	90	31	群馬クレインサンダーズ
	17	須田 侑太郎	S G	190	87	30	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
	18	馬場 雄大	S G	195	90	26	—
	19	西田 優大	S G	190	90	23	シーホース三河
§	20	寺嶋 良	P G	179	77	24	広島ドラゴンフライズ
※	22	ファジーカス ニック	C	207	114	37	川崎ブレイブサンダース
§	32	■ シェーファー	P F	206	106	24	シーホース三河
	33	河村 勇輝	P G	172	68	21	横浜ビー・コルセアーズ
	43	永吉 佑也	P F	198	115	31	ライジングゼファー福岡
	71	井上 宗一郎	P F	201	105	23	サンロッカーズ渋谷
※	88	張本 天傑	P F	198	100	30	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
	91	吉井 裕鷹	S F	196	94	24	アルバルク東京
		平均		191.5	92.1	27.5	

PG ポイントガード、SG シューティングガード、SF スモールフォワード、PF パワーフォワード、C センター

§ : イラン戦のみ ※ : カザフスタン戦のみ ■ : シェーファー アヴィ 幸樹

8月26日(金) vs. イラン (アウエー・テヘラン)

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
イラン	25	19	21	14	79
日本	27	5	15	21	68

アウエーゲームとなるイラン戦では米国籍のスタッフ2名が米国政府のイラン渡航禁止施策のため派遣されず、ヘッドコーチは佐々コーチが代行した。登録選手が11名であった。

日本は、第1クォーター、開始早々に3点シュートも決まってリードしつつ互角に戦い、2点をリードした。しかし、第2クォーターは出だしのミスから厳しい体勢からの3点シュートを連続して落とし、残り2分半ほどの#11馬場の3点シュートから5得点したのみで、相手を19点に抑えたが、前半は32-44の12点ビハインドを負う。

後半の日本は、第3クォーター、#11馬場の3点シュートで始まり、#2富樫、#43永吉のシュートで残り3分ほどには47-53と6点差まで詰めた。しかし、その後、一気に離され47-65と18点差に開く。第4クォーター、#33河村の活躍と#11馬場が2本連続のダンクシュートを決め、残り5分を切った#6比江島のシュートで10点差まで詰めた。しかし得点はその後が詰められず、68-79と11点のビハインドで終わった。

日本は#18馬場が27得点と奮闘したが、第2クォーターの14点差は大きく、互角の相手では厳しい対戦となる。3点シュートの成功率、イラン43.5% (10/23) に対し日本の27.5% (11/40) は悲しい。リバウンドも51対31と大幅な差がついた。

8月30日(火) vs. カザフスタン (ホーム・沖縄)

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	14	13	22	24	73
カザフスタン	13	14	10	11	48

第1クォーター、日本は、シュートが決まらず、#17須田の3点シュートと#33河村がフリースローを決めて14-13とリードする。第2クォーターも#19西田、#22ファジーカーズの得点でリードをキープするも、ミスで21-21の同点、#2富樫の3点シュートでリードしても再度追いつかれて27-27の同点で折り返す。3点シュートが3/18の16.6%と不本意な前半であった。

後半の日本は、第3クォーター、ファジーカーズが4連続得点してからオフェンスが活発になり、#71井上の連続3点シュートで残り6分ほどで39-29と10点差をつけた。更に#91吉井の連続得点などがあり、49-37と12点をリードした。後半、日本は目指すチームプレイが発揮できたのであろう。安定した攻守で最終73-48のスコアで圧勝した。

データを見ると日本の2Pシュート成功率は61% (19/31) でカザフスタンの41% (18/44) を相当上回り、3Pの成功率20% (7/35) を大いにカバーできた様相である。しかしリバウンドでは40本と相手の50本をかなり下回り課題も出てきた。

チームとしても#43永吉以外は全員得点して、ゲームが終わってからホーバス・ヘッドコーチもご機嫌だった。3Pシュートの確率を除けばヘッドコーチの目標がある程度クリアされたような戦いでもあった。

日本代表チームの2次予選残りの日程

Window 5	2022年11月11日(金)	バーレーン	vs.	日	本
	2022年11月14日(月)	カザフスタン	vs.	日	本
Window 6	2023年2月23日(木)	日	vs.	イ	ラン
	2023年2月26日(日)	日	vs.	本	バーレーン

日本は開催国枠で本戦に出場できるので、ヘッドコーチは若手からベテランまでを出場させて、本戦に備えている様子である。これまでの試合、用兵の点では実入りのある戦績ではなかろうか。アジア地区予選では残り4試合を全勝して本戦に臨んでほしい。

以上

第 24 回Wリーグ情報

[編集部]

・Wリーグ オータムカップ 2022 in 高崎

リーグ戦に先立ち9月2日～4日に高崎アリーナにて「Wリーグ オータムカップ in 高崎」が開催された。参加チームはWリーグの14チーム、社会人チーム強豪の6チームと招待1チーム（U18女子日本代表）。参加チームを3ブロックに分けてトーナメント方式で戦った。

来場者は3日間で合計1678人（2日：447人、3日：709人、5日：522人）であった。



優勝チーム Aブロック：シャンソン化粧品 シャンソンVマジック
Bブロック：富士通 レッドウェーブ
Cブロック：トヨタ紡織 サンシャインラビッツ

・第24回Wリーグ

第24回WJBLは、2022年9月22日から10月1日にオーストラリアのシドニーで開催されるFIBA女子バスケットボール・ワールドカップ2022の終了後、2022年10月19日から2023年4月17日までに開催される。

トヨタ自動車の3連覇成るか？ 阻止するチームはどこか？

レギュラーシーズン

レギュラーシーズンは2022年10月19日の開幕戦（トヨタ自動車－ENEOS）から2023年3月19日までの14チームによる2回戦総当たり（1チーム当たり26試合）、全364試合を全国各地で行う。試合主管はWリーグが11試合、クラブチームが64試合、県協会が289試合。参加チーム14には新規参入の姫路イーグレッツが含まれる。

プレイオフ

プレイオフは2023年4月1日のから2023年4月17日までレギュラーシーズン上位8チームによるステップラダートーナメント方式で、Wリーグ主管により行われる。

セミクォーターファイナル（2023年4月1日、会場：未定）、1戦先勝方式

・レギュラーシーズン5位対8位（S1） ・レギュラーシーズン6位対7位（S2）

クォーターファイナル（2023年4月2日、会場：未定）、1戦先勝方式

・レギュラーシーズン3位対上記S2の勝者（Q1） ・レギュラーシーズン4位対上記S1の勝者（Q2）

セミファイナル（2023年4月8日～10日、会場：未定）、2戦先勝方式

・レギュラーシーズン2位対上記Q1の勝者（SF1） ・レギュラーシーズン1位対上記Q2の勝者（SF2）

ファイナル（2023年4月15日～17日、会場：未定）、2戦先勝方式

・上記SF1の勝者対上記SF2の勝者

以上

【先人の軌跡】

京都のバスケットボール活動にみる「先進性と先見性」

関西圏（神戸・大阪・京都）の発展と

[歴史部]

神戸・大阪・京都に誕生した三地区のYMCA体育部は、各種の大会を企画し、日本のバスケットボールの発展に大きな礎を築いた。

京都人の気質には、古いものを大切にし、新しいことにも関心が高く、目新しいものを取り入れる先進性もあり、加えて、独自性といった性格も備えている。京都を発祥とする個性の豊かな活動をする世界的企業も多く存在する。大正から昭和につながる時代の京都バスケットボールの活動に、多くの「先進性と先見性」を見ることができる。

・「関西圏のYMCA 三地区の連繫」による普及「地方の時代」へ

日本のYMCA（キリスト教青年会）は、1880年（明13）の東京YMCA設立に続き、1882年（明15）に大阪、1884年（明17）に横浜、1889年（明22）に京都、1894年（明27）に札幌、1899年（明32）に神戸、1902年（明35）に名古屋など、全国に都市YMCAが設立された。

東京YMCAを中心とした関東地区のバスケットボール普及のひろがりとは異なり、大阪、神戸、京都は、三地区のYMCAを中心に「関西圏のバスケットボール」が形成され、広くバスケットボールが普及・発展した。

・「京都のバスケットボールの活動」各種の大会を創設

京都は、関西でも常に実力の上で首位を占めていた歴史が古いうえに「日本女子スポーツ連盟」「関西女子籃球協会」「大日本バスケットボール協会京都支部」「府下男女中等学校体育連盟」など多くの組織にささえられた各種の大会が数多くあった。（京都70周年記念史/京都バスケットボール協会/東浦武雄氏）

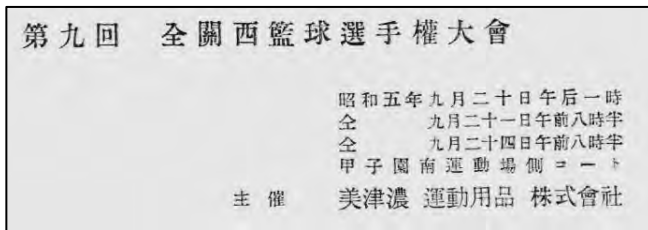
・「京都YMCA」（古い歴史と多くの人材の輩出）

1915年（大4）には、京都YMCAチームの佐藤金一が率いるバスケットボールが始動した。1917年（大6）東京の芝浦埋め立て地で開催された第3回 極東選手権競技大会に、京都YMCAチームが日本代表チームとして出場し、選手には石田孝清（元京都協会会長）、加藤誠一（同志社大、YMCA職員）、大久保昶彦（元京都籃球協会会長）など。京都YMCAは、のちに京都のバスケットの指導者となる多くの人材を輩出した。

（注）佐藤金一 1884年（明17）～1949年（昭24）

愛知県出身、明倫中からアメリカに留学し、1909年（明42）6月2日ウィシコンシン大学を卒業。在学中、バスケットボールに熱中する。帰国後、京都一中（大2～7）や八高などで英語を教えながらスポーツの普及に努めた。

- ・「全関西籃球選手権」を独自に主催した「美津濃運動用品株式会社」（ミズノ）



大正の末から昭和5年までに開催された「全関西籃球選手権」は甲子園南運動場側コートで開催されYMCA体育部と関連せずに「美津濃運動用品株式会社」が主催している。

その後この大会は、「関西籠球協会」が主催、大阪朝日新聞社が後援して開催された。

- ・女子バスケットボールの普及に貢献「木下東作」と「藤山快隆」

1925年（大15）関西女子籃球協会が設立され、1928年（昭3）「第1回全日本女子籃球選手権大会兼全日本女子中学校籃球選手権大会」が京都女子高等専門学校で開催された。大阪毎日新聞社が後援し、関西女子籠球協会の顧問である木下東作の協力のもとで開催されたと考えられる。

（注）木下東作（1878.6.27.～1951）

東京帝国大学医科卒、大学院卒業後、オーストラリア留学、大阪医大教授、1922年（大11）大阪毎日新聞客員、運動部長などを務めた。女子の陸上競技の国際的統括団体である国際女子スポーツ連盟（1921～1936）が創立され、日本に1924年（大13）日本女子スポーツ連盟を設立・創立した。女子陸上の人見絹江選手を育てた。



（注）藤山快隆



大正13年発刊「バスケットボール」の著者、明治後期に運動生理学をわかりやすく解説、「木下東作」が監修を協力。鳥取県出身、東京の女高師（お茶ノ水女子大）から三高（京都大）に来られ、府立体育教師、府立第一高女などでバスケットを指導、京都女子のバスケットの発展に貢献。

- ・京都籃球協会の創立とその後京都籃球排球協会へ継承

1918年（大7）関西YMCAの第1回体育部大会が京都で開催され、1921年（大10）京都岡崎公園コートの開設を機に、近畿バスケットボール大会（京都YMCA主催）1923年（大12）第1回 関西バスケットボール大会（京都YMCA主催）などの大会が京都において開催された。

1925年（大14）京都籃球協会を創立、会長は、大久保昶彦、役員は石田孝清、藤野弥一郎、高橋秀三など。1925年（大14）全関西女子排籃球協会設立、京都女子籃球協会を藤野弥一郎・加納勝之助を中心に設立。京都YMCAでバスケットボールを経験していた人たちによって大会を運営。

1926年(大15)には、京都籃球協會を發展的に解消し、京都籃球排球協會(会長 竹上藤次郎)を設立し継承される。従来から、YMCAの活動は、排球を同様に球技として行っていたので京都籃球排球協會としてその活動を継承した。

・京都体育協會の設立と「会長 竹上藤次郎」

1922年(大12)極東選手権大会が大阪の築港を会場として開催された。主管は、大阪体育協會であったが、実質は、近畿の各地区が運営していた。その後、京都地区関係者の中から京都においても大規模な競技会を開催したいとの意向が芽生え、府内のスポーツ・体育活動を統括する体育協會の設立を必要とする事態が成熟してきた。

1927年(昭2)8月に京都体育協會設立事務所が京都ホテルの改築事務所に附設され、1928年(昭3年1月19日)京都ステーションホテルに於いて、発足・結成の会議が開催され、「京都体育協會」が誕生、会長に「竹上藤次郎」が就任。

会長の竹上藤次郎は、体育協會の活動について、当時としては先見的な考え方を「体育協會会報」で語っている。

・京都体育協會会報 第1号(昭和8年2月1日)

「体育よ!何處へ行く!」京都体育協會 会長 竹上藤次郎

報會會協育體都京

日一月二年八和昭

京都體育協會會報

KYOTO STATION HOTEL

體育よ!!何處へ行く!!

京都體育協會會長 竹上藤次郎

體育とは保健? スポーツとは競技? 否!! 否!!

▲昭和二年京都體育協會發會の際有力な實業家に贊助と後援を求めたところ、「一樣に、そんな體操の會を養成する必要はない。」と斷られた。其れ程「一般的に體育」と謂ふ言葉すら認識せられて居なかつた。

▲併し、スポーツ仲間間の努力に依りて、多數の實業家の了解と後援を得て、毎年の年中行事も無事に行ひ來つたが、幸に昨年第十四回オリンピックに、京都から澤山の選手が出場する様に成つてから、又

▲日本が陸上にも相當な成績を収め、水上には大勝を得てから一般的に「體操の會」と聞進へられる様な事はなくなり、却つて有力者から進んで特別會員に入會して下さる様になつた。

▲其れと同時に我等仲間の方では「體育とは何ぞ?」「體育とは保健か?」「スポーツとは競技か?」と論議が起る程進歩して來た事を喜ぶものである。

▲其進歩の結果が、本協會の部制を増加し、年中行事も創立當

時の十倍にも達し、固辭で全體的に考へてもこんな都合的にまとまつた協會はないであらうと、我田引水に廻り奔るのである。

▲問題に成つてゐる「體育」が保健であらうと、競技であらうと必勝であらうと、我等は何の議論もする必要がない。

▲否、内面的には「眞の目的を研究する事は無駄ではない。併しながら、議論對れになりたくない。今の場合は」

▲何でもかまはず、唯「體育」の進歩發達に精進すべきである。我々は欲が深いと謂はれるかも知れないが、

▲「體育」は保健も目的にしたい。競技も感にそりたい。必勝も期したい。而して學生には學業の進歩、商工業者には業務の、優秀な成績を挙げしめて、スポーツに精進せしめたい。

▲「學業」「業務」の成績迄思ひ、スポーツの必勝を期して貰ひたくはない。

▲日本のチャンピオンは必ず學業成業の成績優良者であるといはれる程スポーツ業は併行主義が眞の體育の最後の目的であらねばならぬ。

▲體育よ!! 何處へ行くか?

業績と併行して精進出来るだけ精進して有終の美を濟すべきである。妄言を多謝す。

●花背で關西スキー

ジャンプ大會

本會スキー部最初の健として行つたスキー講習會は盛會裡に終つたが、次に大塚後援の下に左記要項で第一回關西スキージャンプ大會を行ふに就き、ジャンプ最初の發端門として奮つて参加出場せらるゝことを望む。

一場所 花背スキー場ジャンプ臺

一日期 二月二十六日(第四日曜)花背より開始

一審判 木原均氏 諸方澤光氏

一申込 二月二十五日迄はステーションホテル總務事務所迄書は願ふなりとも、姓名年齢所属俱樂部名明記のこと。

●陸上競技練習會

二月より四月に至る三ヶ月間毎日曜午後二時半より檜物園運動場(兼天・野天の場合)は運動場(南府農會)で陸上競技の練習會を行ふを以て希望者は電話又は兼書で一山長好國氏へ。指導員は小林府體育主事(全脱)金

昭和2年に京都府体育協会発会の際、有力な実業家に賛助と後援を求めたところ、一様に「そんな体操の会を賛成する必要はない。」と断られ、一般的に「体育」という言葉すら認識はなかった。第10回オリンピックに日本が陸上にも相当な成績を収め、水上には大勝を得てから「体操の会」と間違えられることもなくなった。それと同時に「体育とは何ぞ」「体育とは保健か、スポーツとは競技か」の論議が起きるほど進歩してきたことを喜ぶものである。「体育」は、保健も目的にしたい競技も盛んにやりたい。学生には学業の、商工業者には業務の、優秀な成績を挙げてスポーツに精進せしめたい。「学業」「業務」の成績悪くして、スポーツの必勝を期してもらいたくない。日本のチャンピオンは、必ず学業の成績優良者であるといわれる程スポーツ業績併行主義が真の体育の最後の目的であらねばならぬ。「体育よ、何處へ行くか」業績と併行して精励し出来るだけ精進して有終の美を斉すべきである。

(注) 竹上藤次郎 (1887年(明20)1月17日～1961年(昭36)8月13日)

大正から昭和期に京都商工会議所会頭、衆議院議員、京都府会議長などを務める。

・京都バスケットの成長期 1929年～1934年(昭4～昭9)

「昭和8年度 京都体育協会の活動」

籠球部では、「全国中等学校籠球大会」「京都女子中等学校リーグ戦」「全国大学高専倶楽部籠球大会」「京都男子中等学校リーグ戦」「明治神宮体育大会籠球女子予選」「明治神宮同籠球男子予選」「全国女子籠球大会第1部・第2部(3年以下)」「全日本籠球選手権大会女子予選・男子予選」など、年間を通じて数多くの大会を主催している。

「籠球講習会」も開催し、学童部は、「全京都学童籠球大会」を主催しバスケット普及に力を傾注している。さらに昭和8年5月に「ハワイ大学と京都帝国大学籠球競技会」を京都府立一中体育館で開催している。

昭和8年度の活動として、1年間に国際試合を含め実に11回以上の大会を京都体育協会が主催している。

・1931年(昭6)大日本バスケットボール協会 京都支部設立

日本バスケット協会設立に呼応し、京都籃球排球協会を解散、大日本バケッボール協会京都支部が設立され、支部長に北村直躬、理事長に松本英三が推され日本協会の地方団体として大会運営にあたる。同じく秋には竹上藤次郎を会長とする京都体育協会の一部門として京都体育協会籠球部が府下全体のチームを統制する機関として設立された。

・京都の女子バスケットボールの大会

1925年(大15)京都女子籃球協会が設立され、1927年(昭2)から関西女子籃球協会主催のもと「全日本女子籃球選手権大会」「全日本女子中等学校籃球選手権大会」が約8年間継続して開催された。

近畿一円に女子バスケットボールが盛んになったころ大阪毎日新聞の後援で大阪に関西籃球協会が結成された。年2回美吉野グラウンドで関西選手権を開く外、各地で地方大会も開催した。

あるミッション系の女学校からバスケットは女子には過激に過ぎて不適當だという意見が出た。その頃、アメリカではやっていたディビジョンゲーム(コートを前中後

衛に三分割し区別して後衛—中衛—前衛とパスして前衛のみがシュートする)に切り替えるべきだという意見があったが、結局は、多数決で従来通りのルールに落ち着いた。この決定で日本の女子のバスケットボールの方向が決まった

・京都バスケットボールの文化「先進性と先見性」

日本のバスケット史上初めての国際大会の代表は、京都YMCAチーム。兵庫、大阪、京都の関西圏のYMCAが協力して大会を開催するなどの三地区のYMCAの先見性は、関東圏のバスケットの普及とくらべて男女、世代などの垣根なく広く普及した。

浅野延秋（早大OB・日本協会役員）は、第10回極東選手権大会の報告書の中で、バスケットは、東京YMCAのものであるという考え方が普及を遅らせたと指摘、アジア地域で、日本は10年くらい遅れたと語っている。（バスケットボール競技は、YMCA中心の考え方）

京都・岡崎コートの誕生とともに、幅広い人材が京都のバスケットボール普及について柔軟な考え方のもと、中学生、女子、実業団、学生など多くの大会を開催した。京都体育協会は、年間10回以上の大会を開催し、他県の大会の運営にも協力し「バスケット屋」といわれるほどであった。バスケットボールの普及を目的に講習会を催し、中学の大会を年次で2つに分けるなど幅広い大会を企画した。

会長の竹上藤次郎の「体育に関する考え方」も京都協会の活動の基となるものであった。「木下東作」「藤山快隆」などの考え方も大きく京都のバスケットボールの活動に影響をあたえたと考えられ、「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」「美津濃運動具店」などの実業界もその理解のもとに広く後援・協力してもらっている。

YMCAでバスケットボールを経験した人たちを中心に幅広い人材を輩出し、高校、中学の優秀な指導者や実業団チームの誕生など、広い分野でバスケットの普及する土壌が育った。

京都人の気質を原動力に、京都バスケットボール協会の活動は、京都にバスケットボールの文化を定着させ、全国に先んじて日本のバスケットボール普及の時代の先駆けとなった。

以上

あとがき

去る7月京都・向日市スポーツ協会の会長である兒玉幸長氏を訪問、京都のバスケット100年の歴史について意見を交換した。

（兒玉幸長氏は、日本協会の元副会長、現在は向日市スポーツ協会会長の要職を務め、当振興会の顧問）

参考資料（一部掲載）

「京都バスケットボール協会創立70周年記念史」京都バスケットボール協会
「京都バスケットボール100年 in2014」（京都バスケットボール協会90周年）

以上

シニアチーム紹介 J. J 和歌山

[普及部]

今回は“J B B S”の新メンバー J. J 和歌山の紹介です。上田勝也代表からのメンバー紹介を投稿頂きました。

チーム「J. J 和歌山」の紹介

上田 勝也

まず初めに、和歌山県で初めてのシニアチーム「J. J 和歌山」が設立された経緯について説明させていただきます。

1955 年生まれのメンバーを中心に結成された東京「YOYO」の代表杉木氏と我チームの小上氏とは高校時代（中央大学付属高）の同期で、2015 年、YOYO の立ち上げの時からメンバーとして大会へ参加しておりました。その後、小上氏の大学同期の山田氏、友人の仲尾氏、羽藤氏、そして私上田も参加させて頂くことになり、YOYO のメンバーとして八幡カップや横浜カップ等に出場させて頂きました。



しかし東京のメンバーと和歌山のメンバーでは一緒に練習することも出来ず、いつも大会ではぶっつけ本番でした。そんな時、仲尾氏から高校時代の友人や後輩に声を掛けて頂き、和歌山で 11 名のメンバーが集うことになりました。YOYO の杉木氏の方からも、これからは和歌山で単独で登録すれば？というお話も頂き、2021 年 9 月「J. J 和歌山」の誕生となりました。

還暦になってから再びバスケットをするなんて夢にも思っていなかったし、今では 10cm しか飛ばませんが昔を思い出しながら楽しくやっています！

戦歴ですが横浜カップ又代替大会等々の参加申し込みも致しましたがコロナ禍の中、中止やご辞退でまだ戦歴等はございません。ユニフォームも昨年新調しましたが約 1 年間タンスに眠ったままです。新しいユニフォームで早く 1 勝したいのですが、この年齢にもなれば 1 勝よりも全国の色々な所へ行き観光や名物が目的の人も！（笑）

練習については基本的に隔週に一回。大会前には週一回の割合で土曜日の夜 8 時から約 1 時間程度。春休み・夏休み・冬休みは長めです（休みばかり？）。40 歳～50 歳台で、次世代のゴールデンシニアのメンバーの胸を借りながらゲーム形式で行っております。ただ練習日になると、やれ腰が痛いやの、やれ膝が痛いやのなどと言いながら全員集合するのがこのチームのいいところです！

最後になりますが J. J 和歌山のチーム名の由来です。正式な呼び名はジェイジェイ和歌山とちょっとお洒落な呼び名ですが、本来は J i J i 和歌山。そうです。爺爺和歌山の略です。60 歳を越え“元気で可愛い爺さんになりましょう”と言う意味で命名致しました。

和歌山の田舎チームですが、今後色々な大会で全国の皆様方とお会い出来ることを楽しみにしていますのでどうか宜しくお願い致します。

（チーム代表・振興会会員）

以上

【神田バスケットボール資料室】

明治大学バスケットボール部アメリカ横断の遠征

1932年12月から1933年3月まで80日間・13州にわたる

[事務局]

1932年12月シアトル上陸(1932.12.27)から日本帰国に向けロサンゼルス出発(1933.3.4)までアメリカの13州でバスケットボール試合を行う。上陸直後にワシントン大学と対戦し、スコア26-88(12.29)、13-79(12.30)で2試合とも敗退。1933.1.10(スポーケン)ゴンザガ大学と試合、スコア34-50で敗退。ロサンゼルスからの帰途に立ち寄ったハワイ州での試合を含め、通算42試合(14勝28敗)。この間のアメリカ横断は13州、80日間となった。

2月2日カンザス大学でネイスミス博士と会う。博士は、自分のいろいろな写真を持ってきて説明、「石川さん」(石川源三郎)の住所がわからないが「代々木に住んでいるようだ」また「バスケットは日本のスポーツ界をリードするスポーツになっており、人気は年々高まっている。」などと語ったという。(「バスケットボール物語」水谷豊著より)



明大バスケットボール部選手とネイスミス博士(1933.2.2.)

主将の増田貞造氏がアメリカ遠征中に撮影した多くの写真をご子息である増田貞博氏から預かる。

- ・増田貞造(1909.10.12~1945.3) 東京・本郷の生まれ。誠之小学校(文京区)、本郷中(豊島区)、明治大学商学部(昭和8年度主将)。大同製鋼勤務、終戦直前の芦屋の空襲で死亡。
- ・増田貞博(1937~) 明和高校(名古屋)時代に2度インターハイに出場。その後、日本大学に進学、大同製鋼機械関連会社勤務、東海実連に所属し活躍した。

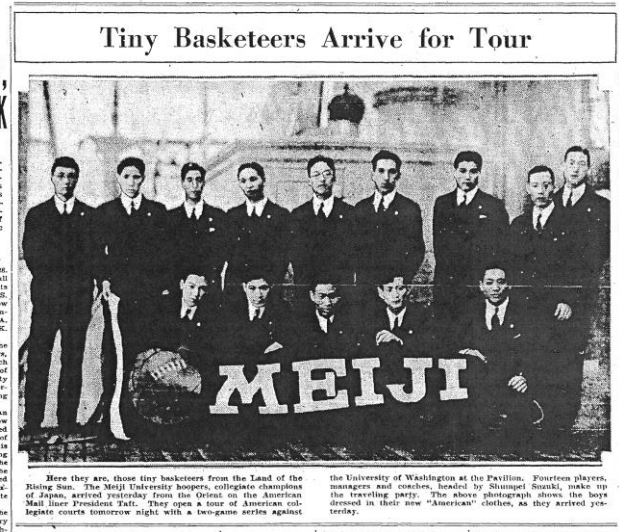
日本は1931年中国に出兵(満州事変)、1932年ロサンゼルス・オリンピック参加、1933年3月国際連盟を脱退した激動の時代。このような時期に、アメリカで大学の選手・関係者など、多くの人達は日本から来たバスケットボール選手をあたたく迎え歓待してくれた。次のバスケットボールの話題は、1936年のベルリンオリンピックの正式種目採用につながる。

以上

【神田バスケットボール資料室】より



大学は、アメリカ遠征資金を調達する目的で
1932年12月4日、日比谷公会堂にて
「若人の集い」という催しを昼夜2回開催



シアトル上陸 (1932. 12. 27) の現地報道
シアトルデイリータイムズ



ロサンゼルス・
オリンピックスタジアムにて
(1933. 2)

籠球部渡米の記事
明治大学 駿台新報
(1933. 11. 19)



高校籠球ふるさと記（石川県編）

[事務局]

石川県で本格的にバスケットボールが始まったのは、今から97年前の1925年（大正14年）と言われている。体育運動主事の西園富吉（東京高師卒）が石川師範で教授して盛んになった。師範学校の卒業生がその経験と知識を県下の隅々の学校まで伝え広めていった。やがてその活動が昭和前期の隆盛に繋がっていく。1928年の第2回近県中等学校大会で石川師範が優勝、1929年の全日本総合選手権大会で石川師範が第3位の戦績を収め、1932年の全日本中学選手権大会では金沢商業がベスト8入りしている。1937年の全日本総合選手権大会で金沢第一高女が第3位の戦績を収め、中出選手が日本協会より優秀選手賞を授与されている。その後、第2次世界大戦の空白期間を経て1945年12月に北国毎日新聞社長の嵯峨保二を会長に迎え、石川県籠球協会が創設された。これは他県や県内の他の競技団体に比べでも素早い動きであった。翌46年2月には第1回県籠球大会を開催、3月には初代理事長に石川師範教授の大門重太郎を理事長に迎え、理事会組織を確立した。

このような歴史と伝統を誇る石川県のバスケットであるが、本誌では1948年（昭和23年）から1988年（昭和63年）迄を対象に、その間、県内で活躍した高校や選手、コーチ・指導者、更には当時の協会関係者にも焦点を当て、石川県の高校バスケット界を通観してみた。内容的には石川県バスケットボール協会創立50周年記念誌「球心讃歌」の他、客観的な資料に依拠し、まとめたつもりであるが、抜けや思い違いがあるかもしれない点、読者の皆様からのご指摘をお待ちしたい。（なお、個人名は敬称略、女性は旧姓、選手の卒業校名の後の数字は西暦卒年、高校名は原則略称）



まずは、**男子**であるが、大きくは4つの期間に分けることが出来る。

第一期（1948年—58年）

インターハイには、羽咋が4回、金沢市立工業と二水が各2回、泉丘、桜丘、大聖寺が各1回出場している。大聖寺の52年のベスト8入りは特筆に値する。また、53年の第8回国体に出場の羽咋が1回戦で優勝候補の墨田工業を破る大殊勲も特筆に値する。

第二期（1959年—69年）——67年は地元開催で2チーム出場

七尾が強さを誇り、インターハイに4回出場している。あとは小松、大聖寺、実践商業、泉丘、羽咋工業、輪島、金沢市立工業、金沢大付属が各1回出場している。七尾の67年のベスト8入りは特筆に値する。あと、各都道府県代表が選抜チームでも可能となった最初の68年福井国体において、石川県チームが準優勝という快挙を成し遂げたことも特筆に値する。

この時期の著名選手としては、太田雅（小松68—日本体育大—日本鉱業、73年の第7回アジア選手権日本代表として活躍）がいる。

この時期、活躍した選手では、清水屋（大聖寺 61－早大）、小竹、久保（ともに実践商業 62－大商大）、酒井（羽咋 65－大商大）、中田（実践商業 66－大商大）、竹原（金沢工大付 67－大商大）、松波（七尾 67－東京学芸大）、川崎（金沢 67－東京学芸大）、佐々木（七尾 68－京大）、永島（金沢市工 68－日大－三井生命）、松村（金沢大付 69－東京教育大）、坂井（大聖寺 70－京産大）らがいる。

第三期（1970年—77年）

県立工業が圧倒的な強さを誇り、インターハイに6回出場している。あとは泉丘と富来が各1回出場している。73年の全国選抜大会での県立工業のベスト4入りは特筆に値する。

この時期、活躍した選手では、西川（二水 71－学習院大）、西野（二水 71－東経大）、永島（県工 71－大商大－大和証券）、鈴ヶ嶺（工大付 71－金沢工大）、山口（穴水 71－金沢工大）、広瀬（県工 71－金沢工大）、吉野、道（ともに県工 71－金沢工大）、端新（羽咋工 72－金沢工大）、高井（金沢市工 72－金沢工大）、坂谷（金沢高専 72－金沢工大）、中嶋（星稜 72－大商大－大和証券）、久保（雅）（羽咋 73－金沢大）、中野（小松 75－金沢大）、吉本（輪島 75－金沢大）、久保（孝）（小松 76－金沢大）、長野（七尾 76－金沢大）、本江（県工 77－大商大－東芝）、久保（茂）（小松 78－早大）、加藤（金沢高専 78－愛知機械）、中川（金沢西 78－日本体育大）らがいる。

第四期（1978年—88年）——85年は地元開催で2チーム出場

金沢西と七尾が強く、インターハイには金沢西が5回、七尾が4回、小松明峰、穴水、金沢が各1回出場している。七尾の85年のベスト8入り、86年の当時7連勝中の能代工業を破っての準優勝は特筆に値する。

この時期、活躍した選手では、吉田（星稜 79－金沢工大－トヨタ自工）、喜多（県工 79－三菱電機名古屋）、吉江（金沢西 80－拓殖大－大和証券）、青木（七尾 80－金沢大）、渡辺（県工 81－大商大－大和証券）、藤本（県工 81－大商大－いすゞ自動車）、茂崎（羽咋工 83－近畿大－三井生命）、今藤（羽咋 83－金沢大）、長野（金沢西 85－京産大）、本山（金沢西 85－金沢大）、丸谷（金沢西 85－順天堂大）、瀧田（二水 85－金沢大）、石崎（金沢西 86－金沢大）、中嶋（小松 86－金沢大）、木村（金沢西 86－拓殖大）、向（七尾 87－秋田経法大－東芝）、黒坂（七尾 87－玉川大）、水出（金沢西 87－近畿大）、木下（穴水 88－近畿大）、大館（金沢 89－中央大－熊谷組）、可貴（金沢 89－京産大－三井生命）らがいる。

次に女子であるが、大きくは 5つの期間に分けることができる。

第一期（1948年—59年）

前半の6年間は、泉丘と桜丘が競い、後半の6年間は大聖寺と七尾が競っていた。インターハイには、泉丘と桜丘が各2回、大聖寺が4回、七尾が2回、金沢三と二水が各1回出場している。桜丘の53年のベスト8入りは特筆に値する。

この時期、活躍した選手では、新崎（藤花 58－大阪女短大－三菱電機名古屋）がいる。

第二期（1960年—67年）——67年は地元開催で2チーム出場

藤花が圧倒的な強さを誇り、大聖寺がそれに次いでいた。インターハイには、藤花が6回、大聖寺が2回、高浜が1回出場している。

この時期、活躍した選手では、辻（大聖寺62—日女体短大）、山村（大聖寺64—日女体大）、宮本（金沢女短大付65—日体大）、中山（小松66—東京教育大）、新崎（藤花66—大阪女短大）、稲垣（大聖寺68—大妻女大）らがいる。

第三期（1968年—72年）

4校の競い合いの時代。インターハイには桜丘が2回、小松、小松商業、七尾が各1回出場している。

この時期、活躍した選手では、市橋（藤花71—中京女大）、片岡（金沢女子73—倉紡枚方）、蛇沼（金城73—ユニチカ宇治）らがいる。

第四期（1973年—83年）

金城が圧倒的な強さを誇り、インターハイには、松任が出場の82年以外、10回出場している。

この時期、活躍した選手では、石原（金城75—三菱電機名古屋）、長田（金城76—東女体大）、荒家（金城77—シャンソン化粧品）、宮森（七尾79—日体大）、片山（金沢西79—市邨学園大）、沢田（金城79—三菱電機名古屋）、泉谷（大聖寺80—日体大）、沢田（金沢向陽81—日女体大）、山岸、山形（ともに金城81—三菱電機名古屋）、了舟（松任83—愛知学泉大—日本電気）、喜多（金沢商84—大阪体育大）らがいる。

第五期（1984—88年）——85年は地元開催で2チーム出場

小松商業と中島が強く、競い合っていた。インターハイには各3回出場している。中島の86年の第3位入賞は特筆に値する。

この時期、活躍した選手では、加藤（二水85—名古屋経済大）、水口（中島85—日本電装）、桑野（小松86—筑波大）、中村（小松商86—三菱電機名古屋）、越野（金城86—三菱電機名古屋）、古屋（小松商86—学泉女短大—トヨタ自工）、中村（小松商86—三菱電機）、吉岡（小松商87—興銀）、高橋（小松商87—共同石油）、岩端、榊原、山崎（ともに中島87—愛知学泉大）、宮下（中島88—トヨタ自工）、大松、山本（ともに中島89—トヨタ自工）、古屋（小松商89—三菱電機名古屋）らがいる。

<コーチ・指導者>

まずは、67年の金沢インターハイまでを一つの区切りとして振り返ってみると。戦前から指導に携わっていた金沢市立工業の**沖野勝**や七尾の**宮田一男**を中心に、新制金沢大学を卒業した情熱を持った若い人材が一丸となって指導に取り組んでいた。1期生では、**東久男**（指導した大聖寺でインターハイに男女ともに出場させた。52年には男子をベスト8まで導いた）、**山崎興喜**（57年から専門委員長として活躍、指導した桜が丘では71、72年と連続して女子をインターハイに出場させた）がおり、2期生では、**小判彪**（指導した桜が丘女子を53年のインターハイでベスト8に導いた）、**小笠原隆**（指導した七尾で数多くの実績を上げる）、**鳥居祐**（指導した母校の二水で数多くの実績を上げる）がいた。こうした草創期の金沢大の卒業生に刺激され、**岩野紀夫**（藤花を指導）、**森忍**（実践商業を

指導)、小田英雄(金沢女子短大付属を指導)が後に続いた。

更に、これに刺激を受けた金沢大卒以外でも河洲光男(金沢工大付属を指導)、橋本憲和(羽咋を指導)、新井慶彦(小松を指導)らも後に続いた。

以上の流れの中で生まれた成果が、68年の福井国体での男子県選抜チームの準優勝である。68年より選抜チームでの国体参加が認められ、石川県では他県に先駆け、山崎監督と宮田コーチを中心に候補選手25名を選出し、早々と練習を重ねていった成果である。

私事に亘るが、老生の出身県である兵庫県でも60年代の強豪チームの指導者のなかに金沢大学の卒業生がおられた。育英高校の金森先生と芦屋高校の北先生。ともに名伯楽の名にふさわしく、多くの人材を育て送り出された。

<協会関係者>

嵯峨 保二 会長 1945年—46年
大門 重太郎 理事長 1946年

中田 岩次郎 会長 1947年—48年
大門 重太郎 理事長 1947年 奥原 政雄 理事長 1948年

池田 久男 会長 1949年—51年
奥原 政雄 理事長 1949年 佐々木 茂 理事長 1950年—51年

朝井 倫郎 会長 1952年—61年
佐々木 茂 理事長 1952年 笹本 正治 理事長 1953年—61年

蚊谷 喜幸 会長 1962年—72年
大門 重太郎 理事長 1962年—65年 佐藤 令久 理事長 1966年—71年
辻 収 理事長 1972年

金原 博 会長 1973年—85年
辻 収 理事長 1973年—75年 松寺 淳照 理事長 1976年—85年

宇野 邦夫 会長 1986年—
橋本 憲和 理事長 1986年—

県高等学校体育連盟バスケットボール専門部歴代部長と専門委員長

氏名の後の()内は所属高校

部長 沢田 忠信 (二水) 1949年—50年	出島 喜一 (大聖寺) 1951年—54年
浜中 亘 (大聖寺) 1955年—56年	高橋 八十平 (津幡) 1957年—58年
張江 啓 (津幡) 1959年—62年	山本 成智 (二水) 1963年—64年
多田 昌登美 (松陵工) 1965年—67年	張江 啓 (泉丘) 1968年—74年
松岡 正信 (泉丘) 1975年—76年	鍋岡 利明 (二水) 1977年—82年
鍋岡 利明 (泉丘) 1983年—84年	

専門委員長

沖野 勝	(金沢市工) 1948 年	蓮池 進暢	(二水) 1949 年—51 年
沖野 勝	(金沢市工) 1952 年—56 年	山崎 興喜	(桜丘) 1957 年—71 年
高橋 威	(泉丘) 1972 年—85 年	鹿野 昇	(金沢西) 1986 年—90 年

<バスケット村 栗ノ保>

栗ノ保のバスケット？ 石川県以外のバスケット関係者でご存じの方は少ないと思われる。誤解を恐れずに申し上げれば、「バスケットボールによる地域活性化，まちおこしの原点のルーツ」とでもいえるのではないか。

1928 年春、地元の小学校に赴任の小酒先生が、バスケットボールをもってこられたのがきっかけで、村でバスケットボールと戯れる声が聞かれるようになった。早速練習を始めた村の小学校は、秋の県下児童大会で優勝、それがきっかけで 40 年まで勝ち続け、「栗ノ保のバスケット」として県下では知らないものはいないほどであった。31 年からは、年 2 回、村で社会人籠球大会を開催、41 年まで続いた。この勢いは戦後も続き、48 年から 51 年まで栗ノ保の選手が主体となったチームで県中学生大会に 4 連勝している。栗ノ保主体の羽咋町チームは大会国体の県予選代表決定戦で金沢市チームに 1 点差で惜敗したが、かなりの実力があつた。当時、東京文理大のスター選手であり、栗ノ保村チームと戦った関口荘次によると前半は互角の戦いであつたとのこと。1954 年、栗ノ保村は羽咋町に合併したが、この伝統は継承され、53 年の第 8 回国体に出場の羽咋高校男子チームが優勝候補の墨田工業を破る大殊勲を挙げている。1994 年の全日本学生最優秀選手賞に輝いた北卓也（羽咋高校 91—拓殖大—東芝）は羽咋市出身で有り、まさに栗ノ保村の伝統の土壌に咲いた大輪の花といえよう。

（注記：本文を作成するにあたり、元石川県体育協会専務理事の北七郎先生の文章を参考にさせていただきました）

北卓也選手について

高校時代はインターハイの出場経験はないが、高校 3 年次に国体県代表メンバーに選出され、全国にその名を知らしめる。拓殖大 3 年次、得点王、4 年時にはキャプテンとしてチームをインカレ優勝に導き、大会最優秀選手に選ばれている。福岡ユニバーシアードでは日本初の銀メダル獲得に貢献、その後、全日本メンバー入り。並外れた跳躍力と天性のシュートセンスで爆発的な得点力を誇った。選手引退後もコーチとして東芝を率いた。

【編集後記】

今回、石川県の高校バスケットボールの歴史を通観するに際し、資料の提供や情報の整理の面で、石川県バスケットボール協会様には、多大なご協力を賜った。誌面を借りて謝意を表したい。

以上

高校籠球ふるさと記（三重県編）

[事務局]

三重県の戦後のバスケットの歴史を語る場合、最初に思い浮かぶのは、1973年の津女子高校の全国レベルでの活躍と1971年の四日市工業高校の東海地区や国体での活躍である。特に津女子が73年開催の第3回高校選抜大会で優勝、同年、地元の津で開催のインターハイで第3位になったのは、選手や指導者の頑張りとは勿論として、それに至るまでの協会関係者の並々ならぬ努力の結果でもある。

さて、戦後の三重県のバスケットであるが、戦争から復員した旧制中学（津、四日市他）で活躍していた選手たちが集まり、県バスケットボール復活のために情熱を注ぎ、靴もボールもコートもない中で、何とか大会運営に注力してきた結果、やがて1948年の県協会設立として結実するのである。

会長に鷺野吉助、理事長に太田健二郎、理事に加藤要、鈴木逸男、井田正典、高瀬正雄、孫福弘、増田孝雄、小川忠治がそれぞれ就任、協会がスタートした。

このような歴史と伝統を誇る三重県のバスケットであるが、本誌では1948年（昭和23年）から1988年（昭和63年）迄を対象に、その間、県内で活躍した高校や選手、コーチ・指導者、更には当時の協会関係者にも焦点を当て、三重県の高校バスケット界を通観してみた。内容的には三重県バスケットボール協会40周年記念誌の他、客観的な資料に依拠し、まとめたつもりであるが、抜けや思い違いがあるかもしれない点、読者の皆様からのご指摘をお待ちしたい。（なお、個人名は敬称略、女性は旧姓、選手の卒業校名の後の数字は西暦卒年、高校名は原則略称）



まずは、男子であるが、大きくは6つの期間に分けることができる。

第一期（1948年—52年）

四日市、津、松阪工、松阪、亀山、宇治山田商、桑名、尾鷲が競り合っていたが、津が抜け出し、51、52年とインターハイに連続出場している。

この時期、活躍した選手では、阿比子義孝（津 53—三重大—三重県教員、後に協会理事長としても貢献）、高山忠男（津 53—立命館大—岡山県の教員を経て故郷に戻り、後に協会の技術委員会や審判委員会の責任者としても貢献）らがいる。

第二期（1953年—60年）

四日市商が圧倒的な強さを誇り、8年連続してインターハイに出場している。

この時期、活躍した選手では、本多（四日市商 61）らがいる。

第三期（1961年—64年）

四日市商の強さにやや陰りが見える中、台頭してきたのが桑名、津工に津、インターハイには桑名が61年、津工が62年、津が63、64年と連続出場している。桑名は諸山を擁し、東海高校総合大会で優勝、インターハイでは、2回戦で東京代表の強豪である北園に敗れた

が、近来にない強いチームとの評価を受けた。この時期の著名選手としては、諸山文彦（桑名 62—日本大—日本鋼管：オリンピック選手、詳細は後述）がいる。この時期、活躍した選手では、川瀬（四日市商 62）らがいる。

第四期（1965 年—71 年）

四日市工が圧倒的な強さを誇り、7 年連続してインターハイに出場している。

四日市工が、71 年の第 1 回全国高校選抜大会東海地区予選、東海高校総体、いずれも優勝を飾ったのは特筆に値する。国体では同校を中心とする少年チームが 70、71 年と東海予選を勝ち抜き、ベスト 8 に進出したのも特筆に値する。

この時期、活躍した選手では、浜野（熊野 67—大商大）、桜井（鈴鹿 67—トヨタ自工）、酒徳（宇治山田 69—愛知大—名古屋トヨペット）、北村（伊勢 70—大体大）、村木（津 71—立教大）、松尾（四日市工 71—三菱電機名古屋）、水谷、梅田、小林、河野、石井（ともに四日市工 72）らがいる。

第五期（1972 年—79 年）

津工の台頭著しく、インターハイに 4 回出場、これに次ぐのが四日市工で 2 回出場、津、白山、松阪が各 1 回出場している。

この時期、活躍した選手では、中野（四日市 73）、西川（四日市 73—京大）、鈴木（津 73—同志社大）、山本（津工 75）、村井、米森、小沢、加藤（ともに四日市工 75）、高橋、前川、篠田、米本（ともに津 75）、勝谷（津 75—名古屋大）、松田（桑名工 75）、山本（松阪 75）、安原（四日市工 76—京産大）、横山、西山（ともに四日市工 76）、田中（白山 78—大商大—愛知機械）、小野、田村、（ともに津工 79）、中村（山商 79）、安藤（四日市工 79）、石川（桑名 79）、石川、井田（ともに津工 80）、真田、林（ともに四日市工 80）、横山（津西 80）、橋爪（伊勢工 80）らがいる。

第六期（1980 年—88 年）

四日市工が圧倒的な強さを誇り、津工が出場の 84 年を除き、8 年連続してインターハイに出場している。

この時期、活躍した選手では、林、伊藤、瀬木（ともに四日市工 81）、坪内（津 81—立教大）、山田（桑名 81）、岡野（宇治山田商 81）、野間（上野 81）、陣田、宇佐美（ともに四日市工 82）、川口（津工 82—大体大—アイシン精機）、前田（宇治山田商 82）、早川（津 82）、山本（四日市工 83—京産大—三菱電機）、高橋（四日市工 83）、森嶋（桑名西 83—三重大—アイシン精機）、藤巻、小高（ともに四日市 83）、村沢（四日市南 83）、門脇（宇治山田商 82）、高橋、金丸（ともに四日市工 83）、東口、渡辺（ともに津 84）、落合（津工 84）、舘（四日市南 84）、岡野、山中（ともに津工 85）、広田（四日市工 85）、宮崎（四日市 85）、森口（四日市西 85）、佐々木（四日市工 86—東京農大）、田中（四日市工 86）、広田（四日市工 86—拓殖大—アイシン精機）、小津（津工 86—大体大）、水木（四日市 86）、東（四日市西 86）、東口（四日市工 87）、生川、速水（ともに四日市西 87）、高野（四日市南 87）、清水（四日市 87）、長谷川、高橋（ともに四日市工 88）、中村、森（ともに津工 88）、松井（四日市南 88）、大森（四日市 88）、野田（四日市工 89—中京大）、河方（四日市工 89—愛知学泉大—日本電装）、水谷（四日市工 89）、松本（津工 89）、山中（四日市南 89）、中北（伊勢工業 89）らがいる。

次に、**女子**であるが、大きくは6つの期間に分けることができる。

第一期（1948年—55年）

前半は、宇治山田と津が競り合っていたが、51年からは5年連続して津がインターハイに出場している。

この時期の著名選手としては、小林秀子（宇治山田 50—奈良女子大一興銀）がいる。小林秀子は、奈良女子大入学後、文理大で名手下山平作の指導を受けた。小林は、持ち前の粘り強さと天賦の才で小柄ながら、そのシュート力を生かしたプレーで同学の関西学生女子リーグ3連覇、全日本学生女子2連覇に大きく貢献、全日本代表として、実業団選手に交じり東南アジアに遠征した。卒業後、54年に興銀に入行、55年から1年半、主将として活躍、同行の全日本実業団3連覇にも貢献した。

この時期、活躍した選手では谷口（宇治山田 48）、遠藤（宇治山田 51—日紡宮川）、志田（津 52）、柴原、後藤、倉田（いずれも津 54）、阿比子、服部（ともに津 55）、川合、辻、加藤（ともに津 56）らがいる。

第二期（1956年—62年）

前半の4年間は、四日市が、後半の3年間は暁が、それぞれ連続してインターハイに出場している。

第三期（1963年—67年）

桑名、員弁、亀山、木本の競合時代。インターハイには員弁が2回、桑名、亀山、木本が各1回出場している。

この時期、活躍した選手では、岡田（神戸 64—東レ愛知）、斉木（暁 65—大阪女子短大）、水谷（員弁 65—大阪女子短大）、三輪（員弁 65—安城学園女子短大）、水谷（亀山 65—大阪女子短大）、小川（伊勢 66—東京教育大）、浜本（木本 66—日体大）、辻（名張 68—大体大）、久留（鳥羽 68—市邨学園短大）らがいる。

第四期（1968年—73年）

津女子が、圧倒的な強さを誇り、インターハイに6年連続、四日市商が地元開催の73年に1回出場している。津女子が、73年に開催の第3回高校選抜大会で優勝、地元開催のインターハイで第3位になったのは特筆に値する。

この時期、活躍した選手では河村（宇治山田 69—市邨学園短大—日立戸塚）、岡村（伊勢女子 71—ユニチカ山崎）、増田（鳥羽 71—三菱電機名古屋）、山野、北川（ともに津女子 72—三菱電機名古屋）、堀、吉野（津女子 74—三菱電機名古屋）、伊藤（津女子 74—三井生命）、山下、木村、飯田（ともに津女子 74）らがいる。

第五期（1974年—79年）

津女子、四日市商、伊勢女子、四日市女子、津西の競合時代。インターハイには津女子が2回、四日市商、伊勢女子、四日市女子、津西が各1回出場している。

この時期、活躍した選手では、広田（四日市商 78—日立戸塚）、井上（四日市商 78—三井生命）、吉村（津西 79—日女体大）、中村、細川（ともに津西 79）、日置（松阪女子 79）、田中（津女子 79）、大浦、山内、池田（ともに津女子 80）、小辻（四日市農芸 80）、細川（津西 80）、中山（松阪女子 80）、向井（伊勢女子 80—中京女子大）らがいる。

第六期（1980年—88年）

四日市農芸、四日市商、津東（旧津女子）、松阪女子の競合時代。インターハイには、松阪女子が3回、四日市農芸、四日市商、津東が各2回出場している。

この時期、活躍した選手では、小関（松阪女子 81—東芝）、水谷（四日市農芸 81）、形川（松阪女子 81）、稲見（四日市商 81）、鎌田（津西 81）、釜谷（四日市農芸 82—日体大—日本航空）、市川、小林（ともに四日市農芸 82）、新井（四日市商 82）、笠井（松阪女子 82）、小林（四日市 82）、萩本（四日市農芸 83—愛知学泉大）、広沢、釜谷、野口、谷口（ともに四日市商 83）、倉田（津女子 83）、望月（津西 84—日体大）、稲垣、藤原（ともに四日市東 84）、茂木、藤田（ともに四日市商 84）、北村（松阪女子 84）、中村（暁 84）、石川（志摩 85—大体大）、坂本、向井（ともに津東 85）、稲田、服部（ともに四日市商 85）、村山（四日市農芸 85）、鈴木（松阪女子 86—東芝名古屋）、中村、山口（ともに松阪女子 86）、後藤、水野（ともに四日市商 86）、白石（津 86）、太田（松阪女子 87）、角田、藤波（ともに四日市西 87）、鈴木（四日市南 87）、伊藤（四日市商 87）、安池（松阪女子 88—愛知学泉大—日本電装、全日本ジュニア代表）、福井（松阪女子 88）、篠原（津東 88）、芝田（四日市商 88）、山形（桔梗 88）、村田、須藤、福本（ともに四日市商 89）、中村（四日市西 89）、藤井（津東 89）、高橋（松阪女子 89）らがいる。

<コーチ・指導者>

- ・ **大須賀 敬太郎** 桑名高から三重大を経て社会人。桑名高の指導者として同校を 61 年のインターハイに出場させ、三重県が生んだオリンピック選手“諸山文彦”を育て上げた名将。
- ・ **中川 亮太** 1925 年生まれ。津高の指導者として同校を 1959 年から指導、63、64 年とインターハイに連続出場させ、73 年の地元開催（2 校出場）でも同校を出場させた名将。
- ・ **横山 幸雄** 1930 年生まれ。三重師範から三重県高校教員。津女子高の指導者として同校を 73 年の高校選抜大会で優勝させ、同年開催のインターハイでも第 3 位に導いた名将。
- ・ **阿比子 義孝** 1934 年生まれ。津高から三重大を経て三重県教員。四日市工の指導者として多くの名選手を育成した名将。
- ・ **近藤 守** 員弁高女子の指導者。熱血指導で同校を 64、66 年のインターハイに出場させた名将。
- ・ **高野 治** 亀山高女子の指導者として無名の同校を 65 年の長崎インターハイに出場させた名将。
- ・ **大谷 秀世** 1947 年生まれ。亀山高から日体大を経て三重県教員。四日市農芸高女子の指導者として同校を 81、82 年連続してインターハイに出場させた名将。

<協会関係者>

鷲野 吉助 会長 1948年—50年

太田 健二郎 理事長 1948年—49年

高瀬 正雄 理事長 1950年

岩下 かね 会長 1951年—65年

高瀬 正雄 理事長 1951年

加藤 要 理事長 1952年—54年

鈴木 逸男 理事長 1955年—64年

横山 幸雄 理事長 1965年

岡村 初博 会長 1966年—88年

横山 幸雄 理事長 1966年—75年

阿比子 義孝 理事長 1976年—85年

岡安 剛 理事長 1986年—88年

県高等学校体育連盟バスケットボール専門部歴代部長

鈴木 逸男 1948年—63年

伊藤 篤 1963年—76年

川戸 一彦 1976年—87年

<その他>

・三重県が生んだ、オリンピック選手 “ 諸山 文彦 ”

1943年生まれ、四日市市出身。桑名高校3年次に県代表で青森インターハイ出場。2回戦で東京の強豪、北園高校に惜敗したが、その時の活躍で東京オリンピック高校生強化合宿に参加。日本大学へ進学後、その並外れた能力を開花させ、大学3年次東京オリンピック代表に選出される。卒業後は日本鋼管に入社、同社の黄金時代を築き上げた。75、76年の国体では、監督として地元の日本鋼管津を率いて成年男子の部で優勝、三重県のバスケット振興に多大な貢献をした。現役引退後は、日本協会の理事・強化本部長としても活躍。

・高い身体能力と運動量を誇り、怪我も多いが常にコートに立ち続ける元日本A代表選手 “ 桜井 良太 ”

(桜井選手の四日市工業時代は1998年から2000年で本編の対象時期以降であるが、三重県が生んだヒーローであるので、掲載させて頂く)

1983年生まれ、桑名市出身。四日市工業高校3年次に県代表でインターハイに出場。初戦の福岡大濠高校選で37点を挙げる活躍で番狂わせを起こした。更に、ウィンターカップでも強豪の能代工業高校戦で51点を挙げ、ここでも番狂わせを起こした。愛知学泉大学進学後、3年次に日本A代表候補に選出される。2005・2006年のスーパーリーグではトヨタ自動車の優勝に貢献、2006年のFIBA世界選手権にむけた日本A代表に選出される。

2007年レラカムイ北海道に移籍、2011年からはレバンガ北海道に所属、その積極的なプレイスタイルで怪我も多いが、常にコートに立ち続け、「鉄人」と呼ばれている。

【編集後記】

今回、三重県の高校バスケットボールの歴史を通観するに際し、資料の提供や情報の整理の面で、三重県バスケットボール協会様には、多大なご協力を賜った。誌面を借りて謝意を表したい。

以上

事務局だより

[事務局]

- ◇ 新装なった代々木第二体育館を7月に訪問し、コロナ感染防止対策・体育館使用について代々木競技場・事業課担当者と事前の打合せを行いました。コロナの感染者数が増えない厳しい状況ではありますが、参加チームの皆さんのご協力の下、**2022 シニア交歓大会**（10/27・28）を開催いたします。皆さんの「今年最高のプレイ」を期待します。
- ◇ 平成4・5年度の役員改選に伴い就任していただいた**新役員の方々の自己紹介**を本誌「通常総会」の記事に添えて掲載しました。皆さんバスケットボールに対する思いはそれぞれですが、振興会の運営・活動についてご意見ご提案など協力よろしくお願いたします。
- ◇ 札幌市に住む**在間弘**（アリマヒロム）さんが「日本でイチバン高齢のバスケットボール選手」(<https://youtu.be/dZ80V1bQy-0>)とH T V北海道ニュース(北海道テレビ)で紹介されました。在間先生は、「札幌ロートルズ」で活躍の97歳の現役プレイヤー、プラザ No.52（2011年11月）で86歳の先生が紹介されています。
- ◇ 在間さんは、平成23年度第6回**スポーツグランプリ**（日本スポーツ協会制定）を受賞、第8回に故日笠敦（ヒガサアツシ）さん（兵庫県）、昨年の第16回に油井康（ユイコウ）さん（岩手県）が受賞。バスケット界からは、すでに3名の先輩方が受賞しています。
※「日本スポーツグランプリ」とは、長年にわたりスポーツを実践し日本の生涯スポーツのさらなる醸成を目的に制定されたものです。
- ◇ **会費納入のお願い**
今年度会費の納入をお願いしておりますが、まだ会費の納入がお済みでない方は納入をお願いいたします。振興会は会員の皆さんの会費によって運営されておりますので、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

振込み口座番号

ゆうちょ銀行

00100-3-316035

NPO法人日本バスケットボール振興会

三菱UFJ銀行

神保町支店 普通預金口座 1684743

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

みずほ銀行

丸の内中央支店 普通預金口座 1004687

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

以上

プラザ こぼればなし

- ◇ 「AKATSUKI JAPAN」という日本代表チームの「AKATSUKI FIVE」に代わる新たなニックネームを、日本協会は7月28日に発表した。5人制・3人制、あるいは男子・女子のカテゴリーにとらわれず、様々なカテゴリーの日本代表の名称を統一し、世界に挑戦するチームを分け隔てなく、心をつにして応援してほしいとの思いを込めたという。
- ◇ 「FIBA 女子ワールドカップ 2022」は、9月22日（木）から10月1日（土）までシドニー（オーストラリア）で開催され、予選ラウンドを経て、決勝トーナメントで優勝を決定する。女子日本代表はグループBに編成され、試合日程は下記のとおり。

グループB	フランス	セルビア	日本	マリ	カナダ	オーストラリア
	6位	10位	8位	37位	4位	3位

9月22日(木) 14:00 VS. マリ 9月23日(金) 12:00 VS. セルビア
 9月25日(日) 20:30 VS. カナダ 9月26日(月) 16:00 VS. フランス
 9月27日(火) 20:30 VS. オーストラリア

オリンピック優勝国アメリカと、開催国オーストラリアを含む各グループ上位4位までの計8チームが決勝トーナメントに出場する。

「AKATSUKI JAPAN」女子日本代表12名が9月8日に発表され、本誌がお手元に届くころには結果が判明しているが、女子日本代表が決勝トーナメントに出場して活躍することを期待したい。結果は次のプラザ96号で詳細を報告する。

- ◇ **男子日本代表**は、本文に報告されているように、FIBA アジアカップ 2022 を挟んで、ワールドカップ 2023 アジア地区予選が Window4まで終わり、本戦出場4チームのグループで現在5位である。日本は沖縄で本戦を開催するので開催国として出場権は確保されているので、いわばアジア地区の対戦は 2023 年9月ワールドカップ本戦の前哨戦。次の大きな国際大会は2024年にパリ・オリンピックが予定されている。JBAは、選手の選抜など、アジア地区大会を長期的強化計画の重要な一端ととらえている。
- ◇ **運動部の活動について**スポーツ庁は「これからは健全で楽しめるスポーツ、生涯スポーツという視点からの取り組みが重要になってくる」と考えている。部活動の地域以降についてまとめた提言を受けたスポーツ庁は関係3団体に要請文を手渡した。その協力要請の内容は、日本スポーツ協会には指導者を確保するための制度設計、日本中学校体育連盟には民間クラブの参入を踏まえた大会規定の見直し、スポーツ安全協会にはスポーツ保険の整備などである。

以上

NPO法人
日本バスケットボール振興会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-40
豊明ビル 301号室
電話／FAX (03) 3219-9311
メール contact@jbbs.jp
